

中長期目標 (学校ビジョン)	聴覚障がいのある幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 【知】学び合う子 【徳】かなえる子 【体】やりぬく子 </div>	今年度の基本方針	<基本方針> 1. 子どもたちが主役となり「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業・保育づくり 2. きこえに応じた学びの充実 3. 自分のきこえを知る・自立活動の充実 4. 自分のよさを知り、のびす、夢に向かう取り組みの推進 5. からだを動かす楽しさを知り、からだづくりを生活の中に位置づける		<学部テーマ> ○幼稚部…「みんなでやりたいな・みんなにつたえたいな」 ○小学部…「レッツ・チャレンジ」 ○中学部…「レッツ・エンジョイ」 ○高等部…「一期一会」 ○支援部…「めざせ！みんなの頼れるサポーター！！」
--------------------------	---	--	----------	---	--	--

年 度 当 初				評 価 結 果 (10)月			
評価項目	評価の具体項目	現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策	
[知]学び合う子	(幼) ・体験的な活動の充実 ・体験を通じた言葉の拡充、表現する心情の育成	・新しいことに興味関心がある。 ・自分の思いを伝えたい気持ちがある。 ・きこえにくさにより、情報量が少ない。	・手話やキューサイン、身振り等を使って、のびのびと自分の思いを伝えようとしている。	・体験的な活動ができる機会を設定し、それをきっかけとして言葉のイメージを広げる。 ・絵日記や日々の生活の中で、身近な事象への興味や関心を育て、教師とやりとりをする中で、自分の思いを表現しようとする心情を育む。	・「なかよしタイム」の活動の終わりに、楽しかったことや頑張ったことを発表する場面を設けた。回数を重ねることで伝えたい思いが高まった。教師と発表内容を相談する時間を設け、手話や発声など一人一人に合わせたコミュニケーション手段で発表練習を行った。理由をつけるなど、詳しく伝えようとする姿も見られた。	C	・学校祭に向けての劇遊びや汽車ごっこ等で、自分の思いをのびのびと表現できる場面を設定する。繰り返し活動を積み重ねることで、自信をもってやりとりできる経験を増やす。 ・絵日記発表や活動の発表場面で質問をする機会を設け、たずねたり質問を聞いて答えたりする経験を積み重ねていく。
	(小) ・意見や気持ちをお互いに伝え、関わり合いながら、ともに学ぼうとする子どもの育ち	・伝えたい・わかりたいという気持ちが高まっている。自分の意見を積極的に伝えようとする児童もいる。 ・伝えきれない、まとめられないなど、語彙教や文法・読解の課題がある。	・お互いに関わり合い、ともに学び合っている。	・五感を使って語彙を獲得するための適切な支援を工夫したり、獲得した語彙を使って伝え合う場面を設定したりする。	・語彙不足や自分の考えをまとめきれないなどの課題はありながらも、教員間で連携しながら左記の方策を実施することにより、自分の意見を積極的に伝えようとする姿は育ってきている。一方で、意見を言っていて終わりになってしまいがちであり、友だちの発表を意識してきこうとする姿が見られることは少なく、課題である。	C	・左記方策の継続。 ・誰かが発言をする際には、聞き手が話し手の方を向くのを確認してから話すように促す。 ・集団で学習をする際には、席位置をお互いの手話や表情が見えるように場の設定をする。
	(中) ・学習規律 ・目標設定と振り返り ・話し合い活動	・ルール・やり方が明示してあると取り組みやすい。 ・学校生活を楽しみにしている。 ・思いを言語化することに課題がある。 ・予習、復習、学習ルールの定着に課題がある。	・自分の目標をもって学習に取り組んでいる。	・話し合ったり、協力しあったりする体験の工夫をする。 ・学習内容の定着に向け、自分の学習を振り返るための時間を設ける。	・委員会活動や給食当番等の日々の活動で話し合ったり、三校交流会等で相手を意識しどのような工夫が必要か考えて準備したりする機会もあった。 ・学期始めに学習の目標を考え、振り返りの機会を持つようにした。振り返りの習慣はついてきているが、自己評価が甘くなったり、評価のポイントがわかりやすく提示できていなかったりすることがあった。	C	・学校祭や日々の活動の中で話し合いの機会を持つよう、学部での共通理解を進め、事前の見直しを持つようにする。 ・学部研で、学習の振り返りをする中で、達成感や課題を意識することができるよう検討していく。
	(高) ・生徒が考えをまとめたり発表したりする授業実践 ・自学自習・家庭学習の状況把握と指導支援	・集団参加の経験を積んでいる。 ・ICT機器を積極的に使用している。 ・家庭学習の習慣化に課題がある。 ・進路実現に向けた強い意志を持っていない。	・進路実現に向けて自主的に学び、家庭学習に取り組んでいる。	・考えたことを書いてまとめたり発表したりする活動を確保する。 ・担任と教科担当との連携を密にし、自学自習、家庭学習の実態把握と指導支援を行う。	・学部研究のテーマを「主体的な学び」とし、全員が授業改善に取り組んでいる。月1回の学部研究日において、実践報告の取組がスタートしたところ。 ・教科担当を中心に宿題の取組状況を把握し定着を目指しているが、教師の促しが必要な生徒が多い。	D	・引き続き各教科の授業改善の工夫を共有し、生徒の実態把握を深化させるとともに、考えをまとめたり発表したりする力を高めていく。 ・生徒自身が自分事として自学自習や家庭学習に取り組めるよう意識付けするとともに、学部全体で取組状況を共有していく。
	1. 社会で生き抜く力を身につける ①「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業・保育づくり ②きこえに応じた学びの充実	(教務部) ・円滑な学習活動、行事運営 (教育研究部) ・子どもが主役となる授業づくり ～「わかる」「できる」を目指した授業や活動の工夫～	・幼児児童生徒は学習活動に素直に取り組むものの、受け身の姿勢が強い。また、個別的教育支援計画や年間指導計画(個別の指導計画)を作成しているが、それらを十分活用できているとは言い難い。 ・一昨年から「子どもが主役となる授業づくり」の研究に取り組み、3年目の年になる。それぞれの学部で「伝えようとする力」について研究を進め、情報交換などもできた。しかし、「子どもが主役となる」とはどのような姿なのか具体的な姿について、十分に共通理解が図れているとは言いえない。	・子どもが主役となり「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業が展開されている。 ・教師一人一人が、「見直しを持ち、意欲をもって活動や学習に取り組み、学んだことを生活に生かそうとする子ども」を育てる授業づくりに取り組んでいる。	・授業や行事に関して各教科、各学部間の連絡調整を密に行う。 ・毎月の出席簿点検と併せて、授業時数の状況を大まかに把握する。 ・年間指導計画(個別の指導計画)の作成に当たり、教科会をもち、互いに見合う機会を設定する。 ・ケース会議を計画的に実施し、個別的教育支援計画の目標や評価を随時、共通理解する流れをつくる。 ・各学部で、めざす子どもの姿について共通理解を図り、「わかる」「できる」授業の工夫について話し合い、授業及び活動実践に繋げる。 ・鳥豊スタンダードを活用し、授業の方法について振り返る機会を設ける。 ・一人1授業や参観ウイークの実施方法や設定方法を検討し直す。	・授業や行事に関して各学部間の連絡調整を密に行ったり、毎月の出席簿点検と併せて、授業時数の状況を大まかに把握しやすくなっている。 ・年間指導計画の作成に当たり、教科会をもち、互いに見合う機会を設定した。 ・ケース会議を計画的に実施しているが、個別的教育支援計画の目標や評価を随時、共通理解する流れについては今後の工夫が必要である。 ・幼稚部では、子どもの実態把握に努めるとともに、活動内容やねらいについて話し合いを進めた。小学部と中学部ではめざす子どもの姿や支援方法について情報交換を行い、工夫する点について共通理解を図った。高等部では、豊かな学力を身につけるための実践授業を報告しあい、事例検討を始めている。支援部では、通級指導・乳幼児教相談・自立活動それぞれの担当者が、相談者と目標を共通理解し活動を実践した。部内で実践報告をし合い、工夫について意見交換を続けている。 ・年度初めに鳥豊スタンダードを活用し、授業の方法について各自振り返る機会を持った。自分のよくなってきているところ、課題について各自で確認する機会となっている。 ・学部ごとに参観ウイークを設け、その機会に一人1授業を行うよう計画している。	C
	(情報部) ・ICT教育推進計画に基づいた、学びを深めるためのICT活用	・幼児・児童・生徒の学びが深まるよう、各教師が授業において、タブレット端末やスライドショー等のアプリケーションを有効に活用する機会は年々増えてきている。また、Google for Education等を授業において効果的に使い授業を行う場面も増えてきた。しかし、個々による実践は増えてきた一方で優れた実践を共有できていない現状がある。	・幼児・児童・生徒の情報活用能力を伸ばしていくために、「ICT機器を計画的に活用している」と答える教師が8割以上に達している。	・ICTを活用した授業を行う教職員のスキルが向上するよう、定期的にICT機器とアプリケーションの使い方・活用法に関する研修やオンラインやオンデマンドの活用に関する研修を催す。校内の教職員同士でも、情報共有できる場を設け、校内でのICT活用がより活発になるようにする。	・校外学習等で生徒がICT機器を活用して、表現を行うなど新しい試みを行った。指導においては、ICT支援員を活用し、授業の中でのICTの効果的な活用について定期的にアドバイスを受ける機会が増え、授業の中で活用する教師が増えた。また、学部間で有用性のある実践や情報を共有する機会も増え、ICTを効果的に使おうとする機運が高まっている。今後は、個々の実践を共有できる研修会を実施し、さらなる教職員のスキル向上を目指したい。指標としている数値目標は、1月を目途にアンケートの実施を予定している。	B	学部間で共有している情報や実践を研修や便りの形で、職員全体で共有できるよう環境を整える。

年 度 当 初				評 価 結 果 (10)月				
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
[徳]かなえる子 2. こうなりたい自分・夢をもつ ③自分のきこえを知る ④自分のよさを知り、のばす、夢に向かう取り組みの推進	(幼) ・人間関係の基礎の形成 ・自己肯定感の向上	・好きな遊びがある。 ・教師の仲立ちで友だちや他者と関わることを好む。 ・相手の伝えたい内容を理解したり、相手にわかるように自分の思いを伝えたりするのが難しい。	・楽しく遊んだり活動したりする中で、自分の良さや友だちの良さに気づき、自分からかかわろうとする。 ・行事や活動でめあてをもって取り組み、達成感を感じている。 ・係活動などで自分の役割を果たす喜びを感じている。	・子ども同士の思いを橋渡ししながら関わり、安心してできる環境を作るとともに、一緒に活動をするよさを感じられるようにする。 ・少しずつ発展させながら活動を展開し、達成感や満足感を感じることで、自己肯定感を高める。 ・自分なりのめあてを持ったり、役目を果たす喜びを感じたりできる活動を設定する。	・昼休憩等にどこで何をして遊ぶのか、どのように遊ぶのか、子ども同士で相談することが増え、相手の思いもたずねるようになりつつある。 ・給食当番や各クラスでの暦・天気係などの活動に意欲的に取り組み、役割を果たす喜びを感じることができている。	B	・遊びや活動の中で、子ども同士で相談する機会を引き続き設け、相手の思いをききながら自分の思いも伝えて決めていく経験を増やす。 ・2学期より牛乳配りの給食当番を加えたり、活動のあいさつを担当したりするなどする。 ・学校祭の練習等で、自分の役割を意識したり自分なりのめあてをもって取り組めるようにする。	
	(小) ・自分から友だちと関わろうとする姿 ・いろいろな活動に組み込み、得意な事や好きな事を見つけている姿	・友だちのことを気にかけて、教師に友だちのことを尋ねたり、自分から話しかけようとしたりする様子が少し見られる。 ・生活経験が少なく、身の回りへ関心が広がりにくい。	・友だちに自分から挨拶をしたり、遊びに誘ったり、声をかけたりしている。 ・得意な事や好きな事を見つけ、楽しみながら取り組んでいる。	・各教科等において自立活動の視点を大切に、学習を振り返る機会を設定したり、その積み重ねを記録(ワークシート、作文、写真、絵等)に残したりする。 ・身体づくり運動、ダンス、仲間づくり交流会、交流および共同学習の機会の設定等、体験的学習の充実を図る。	・1年生が入学し、最初はお互いに恥ずかしがって教師を介して友だちの様子を知ろうとする姿が見られた。新入生歓迎会や運動会、仲間づくり交流会など学部全体での活動で、左記の方策をしていく中で、お互いに声をかけあったり、気にかけてりする様子がみられるようになってきた。 ・廊下掲示や作品展示、異学年合同での学習発表などを行うことで、友だちを意識した関わりが増えたり、いろいろなことに興味関心を持つ様子が見られたりしている。	・左記方策の継続。	B	
	(中) ・自己理解 ・進路学習	・素直で、互いを思う気持ちを持っている。 ・自分の思いを伝えたいという気持ちを持っている。 ・自分の良さや課題についてあまり把握していない。 ・将来に対するイメージをあまり持っていない。	・自分の良さを知り、相手の思いを受け止め、自分の思いを伝えていく。	・目標を意識できる活動の工夫をする。 ・学年に応じた進路学習の充実を図る。(職場体験学習、職場見学などの活用)	・行事の前には目標を立て、一緒に確認して取り組んだ。活動後には、具体的な場面を思い出しながら振り返り、キャリアパスポートのファイルに綴った。 ・2年生は職場体験学習を行い、職場の担当者から評価してもらうことで、自分の良さや課題に気づくことができた。1年生は職場・施設見学をして、将来の仕事のイメージを少し持ち始めた。	・前期の取り組みを振り返り、自分の成長を実感できるようキャリアパスポートの活用を促し、次の目標設定を確認しながら進める。学校祭等学部合同で行う行事等を通し、自分や仲間の良さを意識できる機会を設ける。 ・前期の体験を元に高校や将来の仕事に対するイメージが広げられるよう学習を進める。	B	
	(高) ・生徒の進路選択・進路決定につながる体験的学習 ・自己理解や他者との良好な関係を築く力を高める自立活動の指導	・自己肯定感の育ちが見られる。 ・目標を意識して取り組んでいる。 ・粘り強く取り組むことに課題がある。 ・他者と良好な関係を築くことに課題がある。	・他者と良好な関係を築きながら生活し、社会参加に向けた態度が育っている。	・職場や学校見学、現場体験学習をはじめとする体験的学習の充実を図る。 ・生徒が主体的に取り組む自立活動の指導の充実を図る。	・職場及び学校見学では、働く様子や施設・設備を実際に見学することによって、見学先に興味を持ったり自己の適否について考え始める生徒があった。 ・1,2年生の現場体験学習では、コミュニケーションをはじめ一人一人が課題と感じていることにチャレンジし、自己理解が深まった。 ・手話パフォーマンスのテーマや内容、演技について生徒同士の話し合いを重ねることで、相手の考えや意見を受け止める力や、相手の良い所を見つける力、自分の考えを伝える力が高まった。	・引き続き進路先に関わる情報提供を行うとともに、必要に応じて見学・体験の機会を設定する。 ・3年生は、今後、学校見学・体験や地域の高校生との合同入試対策を通して取り組みを充実させる予定。 ・生徒一人一人が自己の課題を振り返り、主体的に改善・克服に取り組もうとする指導の一層の充実を図る。	B	
	(支援部) ・豊かな親子関係につながる相談支援活動の取組 ・センター的機能の充実に向けた効果的な取組	・保護者がきこえやことばの育ちの道筋がわからず不安になる。 ・保護者が子どもへのかかわり方や周りへの支援の求め方がわからず戸惑う。 ・年度始まりにニーズが集中し、支援活動の日程調整が難しく実施が遅れる。 ・人事異動等に伴い専門性の維持・継承の困難さがある。	・保護者が安心して子どもにかかわり、きこえやことばの育ちを理解しながら実践しようとする姿が見られる。 ・教育的なニーズに対して、システムの構築をめざしながら専門的な相談支援活動を迅速に実践できる。	・教師がきこえやことばの発達や乳幼児段階の支援方法について学び、保護者に適切な支援を行う。 ・合同活動の充実や他学部との連携を通して、保護者同士のつながりを広げる。 ・関係機関での職員研修用として研修パッケージ(音声付パワーポイント資料)を作成し、グーグルワークスペース等を活用して情報発信を行う。 ・アセスメントを通級担当者が実施する等、通級指導の入級までのシステムを見直す。	・ほぼ全家庭が、きこえの程度や補聴器の必要性について知り、個別相談や合同活動で自分の考え疑問を積極的に話す姿が見られる。子どもの成長に合わせたかかわり方についても理解し、5割程度の家庭が家でも積極的に実践している。 ・「聴覚障がいとその支援」など3つの内容の研修パッケージを作成した。教育相談活動の中で、職員研修用としてパッケージの情報提供をした。 ・STによる研修でアセスメント方法を学び、通級担当者による実施準備が整った。アセスメント後の通級検討会議など校内のシステムを見直した。	・子どもの育ちの理解、保護者の個別の不安やニーズに応じた情報提供の充実を図る。保護者同士のつながりを広げるための内容や規模、回数を検討し、実施する。 ・研修パッケージの効果的な活用をめざして、ホームページやグーグルワークスペース等、情報発信方法を検討する。 ・より迅速な通級指導の開始につなげられるように、他校の通級に関する情報(入級・退級までの流れ等)を収集する。	B	
	(自立活動部) ・自立活動の指導を円滑かつ効果的に行うための専門性向上に向けた職員研修	・発音、言語、障がい理解等に関する職員研修や勉強会を行っている。一昨年度以前は聴覚障がい教育の理論を学ぶ研修を主に行っていた。昨年度からは、すぐに授業に生かせる研修となること目標に、研修を計画、実施している。	・自立活動の授業にすぐに生かせる研修を計画、実施し、職員アンケートの結果で「授業に生かせる内容である」と回答した職員が、80%以上に達している。	・自立活動の専門性を高め、すぐに授業に生かせる内容の全体研修会を年3回、言語もしくは発音に関する自立活動勉強会を年3回計画、実施する。各研修会終了後はアンケートを取り、目標の達成度を確認する。	・8月に全体研修会2回、希望者参加型の研修会を1回行った。また、8月までに自立活動勉強会を2回行った。全体研修会及び希望者参加型の研修会の職員アンケートで「良い」評価が90%以上であった。	・職員アンケートの結果で「授業に生かせる内容である」の項目の回答が80%以上となるような研修内容を目指し、全体研修及び希望者参加型研修の職員アンケートで出た要望の中で、全体研修会で対応しにくいものについては、できる限り自立活動勉強会に含められるようにしていく。	B	
	(総務部) ・子どもたちの活動の様子の掲示 ・学校の魅力の発信	・担当教員人数が少ないことから負担が大きく、掲示が少ない場合があり、業務効率化を進めるための工夫が必要である。 ・学校の史料等の保存状態が良くないことがある。	・効率的な掲示が進んでいる。 ・魅力的に発信することができている。	・業務内容の検討や改善を行う。 ・史料等の管理方法の検討・改善を行う。 ・掲示を工夫し、視覚的に魅力が伝わるようにする。	・掲示担当者だけでなく、行事の担当者と連携を取りながら掲示を行っている。 ・歴史の部屋に遮光カーテンを取り付けたことによって、日光直射の影響の軽減になっている。	・行事担当者だけでなく、各学部とも連携を取り、掲示写真準備の協力を依頼する。 ・遮光カーテンで部屋が暗くなってしまったため、史料展示方法の見直しを行う。	B	
	(進路指導部) ・ニーズに合ったキャリア教育や進路に関する情報提供 ・実態や発達段階に合わせた社会人として必要な力の定着	・進路に関する情報提供やニーズに合った職場見学・学校見学・体験学習を実施できるよう努めている。 ・キャリアパスポートを作成し児童生徒の学習を積み重ねる一方、学部間の連携や書式の検討をしていく。	・生徒・職員・保護者のニーズに応じた進路に関する情報提供を行う。 ・キャリア教育の充実に向け、キャリアパスポートを活用している。	・児童生徒の希望を把握し、見学先や実習先を決定していく。 ・大学や相談事業所など関係機関と連携を図り、情報を職員間で共通理解していく。 ・進路学習や体験学習であがってきた課題や成果など保護者と共有したり、自身で振り返りするためにキャリアパスポートの活用を進める。	・職場・学校見学では生徒・職員・保護者のニーズに応じた見学先を考え、短期大学や工場の見学を実施した。 ・中学部の職場体験や高等部の現場体験学習は、生徒や保護者、担任の考えをききながら、実習先を決定した。 ・キャリアパスポートは各学部で取り組んでいる。特に、中学部で進路学習や行事ごとに振り返りをし、記録をファイルに綴じて活用できるようにしている。	・進路学習や体験学習で見つかった課題や要望などに応えることができるよう、情報収集・伝達に努めたり、研修会を実施したりする。	B	

評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初			評 価 結 果 (10)月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
[体]やりぬく子 3. あきらめない体力・気力 ⑥からだを動かす楽しさを知り、からだづくりを生活に位置づける	(幼) ・からだづくり ・進んで体を動かそうとする心情の育成	・体を動かすことが好きである。 ・運動制限がある子どもがいる。 ・運動経験に差がある。	・いろいろな遊びや活動の中で、自分から進んで参加し、のびのびと体を動かす。	・ダンスや体操等からだづくりの機会を設定し、からだを動かす楽しさを知って、生活の中に位置づけられるようにする。 ・チャレキングなど外部講師の指導の機会を設ける。	・「おはようタイム」の時間を使い、継続的に体を動かす機会を設けた。教師の動きをよく見ながら合わせて体を動かせるようになった。教師役を子どもも担当することで、喜んで体の動きを表現していた。 ・運動会に合わせて、リレーごっこをするなどのびのびと体を動かして遊んだ。	B	・おにごっこなど、ルールのある遊びを友だちと一緒に楽しむ中で、進んで体を動かして遊べるようにする。
	(小) ・地道に作品作りや学級園の野菜作りに取り組んだり、各種コンクール、検定等に挑戦したりしている姿	・からだを動かすことを好んでいる。 ・見通しをもって活動に取り組むことができ始めている。 ・難しいと感じると、最初からあきらめがちになる。	・目標に向かって挑戦している。	・児童の実態に応じた素材やテーマを準備して作品作りに臨んだり、挑戦できそうなコンクールや検定を児童や保護者に紹介して授業と関連させたりしながら取り組む。 ・学級園で育てたい野菜を教師と相談しながら自分で選んだり、水やりや草取りなど畑作業をする時間を随時設定したり、簡単な調理活動を伴う収穫祭をしたりする。	・児童の実態に応じた作品展や検定に挑戦したりしている。頑張った成果が賞に繋がることでモチベーションがあがることはもちろんであるが、コンクール等への出品や検定挑戦ということそのものが学習意欲の高まりにつながっている。 ・学級園での夏野菜栽培で、水やりや草取りなど日々の当番活動に取り組んだ。各クラスで育てた野菜を持ち寄り、収穫祭でピザ作りを行った。一人では難しいと感じてあきらめがちであっても、友だちがしている様子を見たり、友だちに誘ってもらったりすることで一緒にしてみようとする姿がみられるようになってきている。	B	・左記方策の継続。 ・最初から一人であることが難しいときは、教師や友だちがしているのを見ることからはじめたり、教師と一緒にしてみたりしてから、一人挑戦するように促す。
	(中) ・基本的な生活習慣の定着 ・部活動参加	・友だちとの活動を楽しむことができる。 ・困った時に教師に相談ができる。 ・基本的な生活習慣の定着に課題がある。 ・学習に向かう基礎体力が充分ではない。	・基本的な生活習慣や学習に向かう基礎体力を身につけている。	・基本的な生活習慣の定着と基礎体力の向上を図る。	・中国地区ろう学校体育大会(卓球大会)に向けて部活動に日々取り組むことができた。 ・スマホやゲーム等の利用時間が長くなり、家庭生活のリズムが整いにくく、家庭学習や睡眠時間の確保ができず、翌日に影響する場面があった。宿題の内容等、取り組みやすい工夫をすることで少しずつ定着してきている。	C	・体力づくりに取り組めるように声かけをしたり、長期休みの前には取り組みやすい活動を紹介したりする。 ・家庭学習の積み重ねができるよう、継続して声かけや宿題の工夫に取り組む。
	(高) ・好ましい生活習慣への意識を高める取組	・部活動に積極的に参加する生徒が多い。 ・中国地区ろう学校体育大会等の大会に積極的に参加している。 ・進んで挨拶することが習慣化していない。 ・好ましい生活習慣の確立に課題がある。	・健康に留意するとともに、好ましい生活習慣を身につけている。	・好ましい生活習慣の確立に向けた取組の充実を図る。(スマートフォンの使い方、余暇の過ごし方)	・SNSトラブルを踏まえ、情報モラルに関する学習を2回実施した。日頃の携帯電話・スマートフォンの使用状況を振り返るとともに、情報モラルへの意識が高まった。9月下旬に一人一台端末を配布したところであり、生徒の自己管理能力の向上や家庭との連携強化に一層取り組む必要がある。	C	・一人一台端末の配布に併せたルール作りと自己管理の取組について、家庭と連携して取り組んでいく。
	(生活安全部) ・学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画、学校給食計画を基にした、健康で安全な生活習慣の徹底 ・健康維持を意識した体力づくり	・学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画をもとに心身の健康や健康的な食生活について様々な取り組みを計画しているが、学校内だけでの取り組みだけになっている。 ・継続して運動することが難しく、行事に向けての単発な活動になってしまっている。	・養護教諭、学校栄養職員、学級担任と連携し、学習したことを便りに掲載して家庭へ啓発をしている。 ・体力づくりに全学部で取り組んでいる。(各学部で体力づくりを設定する)	・保健だより、長期休業後の生活チェック表(年3回)、食育だよりなどを通して家庭への啓発を行い、学校、家庭と連携して生活習慣(生活リズム)の見直しを行う。 ・各学部の実態に応じて丈夫な体を作るための健康維持を意識した体づくりの習慣に取り組む。	・健康な食生活について養護教諭、学校栄養職員、学級担任と連携し、指導したことを便りを通じて家庭に情報提供を行った。また、給食の時間に学校栄養職員より「夏バテしない食事」「受験期の食生活」等について指導し、意識づけを行った。 ・体力づくりについては、各学部でそれぞれ意識して取り組んでいる。外部講師にきていただき、体の動かし方について指導を受けている。 ・GW明け、夏休み明けに生活リズムチェックを行った。就寝時刻を早めたいと振り返る生徒もいた。	B	・各学部で丈夫な体作りに具体的に取るため、計画を立てて実践を行う。 ・引き続き、おたより等を活用しながら家庭への情報提供をしていく。
4. 業務改善 ⑥子どもと向き合う時間を充実するための業務改善	(業務改善) ・業務の効率化、簡素化 ・時間外勤務者の解消	・校内で完結する提出文書、作成文書に見直しの余地がある。 ・昨年度時間外業務時間45時間/月超の職員が月平均3.5人、360時間/年超の職員が10人。	・時間外業務時間45時間/月超の職員が月平均1人、360時間/年超の職員が3人。	・削減すべき業務、効率化をはかる業務を検討する。 ・教員自身がより勤務時間管理を行うことができるよう手立てを施す。	・時間外業務時間45時間/月超の職員が月平均5人(9月末現在)である。 ・早帰らーDAYを、月に学校全体と各学部毎に1回設定し、定時退庁の意識を高めた。 ・文書配布のアンケートを見直し、Googleフォームを活用した各種アンケートを実施した。	C	・時間外業務時間45時間/月超の職員は固定化しているため、業務の進め方や業務分担を個別に見直す。

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%程度) C:変化の兆し(60%程度) D:まだまだ不十分(40%程度) E:目標・方策の見直し(30%以下)